

# 唱導文学における、説得の仕方

—『百座法談』における「何況や」「まして」小考—

安 東 大 隆

## はじめに

唱導というのは、周知のように、人々に対して、仏教の教理や、内容を、わかりやすく、説き聞かせる、ものである。その為には、時として、因縁・比喻を、用いたりしている。

人々に、より信憑性を与え、又、仏教への導入を、容易にする為に、どのような方法で、説き進めて、いったのであろうか。それには、色々な方法が、考えられよう。来意・釈名・入文判釈などは、その代表的なものである。

又、教義を、比喻を、用いて、説明した後には、「このような場合でも、しかるべき結果があるから、更に、心を傾けて、努力した場合には、それ以上の、効果が、得られるであろう」という形式で、説きしめず方法がある。しかも、この方法は、かなり煩繁に、用いられている。その時、常套句として、「何況や……」「まして……」という語が、多用

されている。そこで、『百座法談』(なお『百座法談』の引用は、桜楓社の『百座法談聞書抄』佐藤亮雄氏編のものによった。引用文の頁数も同書による。)における、その用法について、考察してみたい。

(1)

『百座法談』は、天仁三年二月二十八日から、はじめて、法花講を、百日百座おこない、更に又、ひき続いて、二百日間に、二百座の講を、おこなったものの、聞き書きである。形式としては、百座の講を、三回ひき続いて、修したものである。しかし、その三百座の講のうち、現在のこつているものは、二十日間のものであり、具体的な日、および、講師は、次のとおりである。

二月——二十八日 永縁

二十九日 香雲

三月——一日 香雲

二日 "

三日 "

四日 "

五日 "

七日 "

八日 "

九日 "

十二日 実教

二十四日 大輔

二十六日 "

二十七日 "

六月——五日 香象

十九日 善法

二十六日 教釈

閏七月——八日 新成

九日 "

十一日 覺巖

以上の、二十日間のうちで、

「何況や……」という語を、用いているもの 七日

「まして……」という語を、用いているもの 六日

であり、二十日間で、十三日間は、両者いずれかの語を、用いて、その結びとしていることが、わかる。

以下、順次、具体的に、みていこう。

○何況や……

△三月一日

●舎衛国の屠者、あくいは、僧の物を盗む為に、僧房にしのび込み、『法花経』の「譬喩品」の「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此処、多諸患難、唯我一人、能爲救護」という一文を、聞き、三日後に死んだにもかかわらず、その功德により、地獄から、蘇生した。

●ある聖人のもとにいた、十五才の沙弥は、十八才までの命しかなかったのだが、「方便品」の「諸仏兩足尊、知法常無性、仏種從緣起、是故説一乘」という個所を、何度も聞いた功德により、八十才の命を、与えられた話、

この両話の、結びとして、

この経は、一偈一句を持ちたてまつるに、命のび、病のぞかずといふことなし。何況や、ふかく信じ、あつくだのみたてまつらせたまはむ功德をや。(89頁)

と、「譬喩品」「方便品」の一文を、聞いただけの功德をひいて更に、それ以上に信じ、頼みたてまつった場合の、功德を、類推させようと、したものである。(傍線は、便宜上、施したものである。)

△三月三日

平州の僧延は、『法花経』を誦し、極楽に行こうと思ひ、読みはじめ、百部になる夜、その読んだ『法花経』の文字の一々が、羽になってとんで、極楽に行つた夢をみる。

僧延法師の、ただよむ事をしけるだにも、仏あらはれ結ひ

けり。

何況や、内親王殿下の、我も玉の御すがたをかたぶけて、頗梨をかけ、露をつらぬく点、ひとつもかくる事なく、人をおしへて書写せしめ給事も、年しごろにならせたまひぬるうへに、今、百座御講、開講、演説せしめ御す功德は、申尽すべからぬ事なり。(94頁)

と、内親王の善行の、功德の大きさを、説明している。

△三月四日

若き沙弥が、『法花経』を、おしえられたが、読む事が出来ずに、只、首題の名字ばかりを、よんでいた。その沙弥は、その事を、悲観して、高い岩の上より、身を投げた。地獄にうまれ、鏝の中へ、つき入れられた折、獄卒の鉄の杖が、その鏝のふちにあたり、音をたてた。その音を、寺の鐘と感違ひして、首題の名字を、唱えたので、鏝が割れて、蘇生する。然者、法花経は、ただ首題の名字をよみたてまつるに、不可思議の徳に御す経なり。何況や。(96頁)

と、言外に、内親王の開講の功德を、ほめてゐる。

△三月八日

松尾明神が、長い間『法花経』を、よみしめてゐる、空也上人の衣を、乞い求めた。

「今この法花の衣をき侍るより、悪業の霜きえ、煩惱のあらしふきやみて、いとあたたかになりて侍べり。これよりに後、仏道なり給はむまで、必まもりたてまつらむ」とて、ひじりをおがみてなむさり給にける。

何況や、書写供養の御ちからに、仏の御はぐくまれてまつらせ給なば、罪業すなはちのぞかり御しぬらむ。(101頁) 102頁)

空也上人の功德を、述べ、書写供養の功德の甚大さを、強調している。

△三月九日

阿弥陀魚の話であるが、きうじ国のかたわらにある島の、漁師は、魚を、とり逃して、思わず「阿弥陀仏」というと、その魚が、もどつてきた。そこで、「阿弥陀仏」ということにより、多くの魚を、とつた。又、その「阿弥陀仏」と称した功德により、全員極楽に、うまれた。

いかにいかにいはんや、心をいたして孝養報恩のために、阿弥陀経供養し、後世菩提の為に、念仏せしめたまはんをや、(103頁)

魚を、とるといふ、いわば、殺生の為であるが、念仏をし、その思はざる利益によつて、往生した事を、述べ、孝養報恩・後世菩提の為に、心をいたして、念仏する功德の、大きさを述べたものである。

△三月二十四日

●『阿弥陀経』を、慈恩大師が、方等経の印鏡と、釈したことを引き、その鏡から、「楊州の百鍊の鏡、貴妃の玉のすがたくもりなし」とし、

いかにいはんや、此阿弥陀経の鏡にむかひなば、極楽へまいらんこと、おぼつかかなかるべからず(109頁)

●一人の比丘尼が、花一房をとり、帰る途中、古き堂の軒に、休息した。そのついでに、仏得給へと言ひ、花を投げ入れて、帰った。その功德を、弥勤にたずねると、三悪道を離れ、九十一劫程、転輪聖王の報を受け、その後、仏になると言ふことであつた。

いかにはんや、こころをいたして、経をかき、仏を供養したてまつらせたまはむ功德は、まうすべきにもあらず。

(111頁)

と、花一房を、仏堂に、なげ入れて供養した功德に、くらべて、経を書き、仏を供養する功德の大きさを、述べたものである。

△六月二十六日

極悪の人、孫居は、乞食に來た、沙門を、罵り、口まねをし、声をひがませて、「妙法蓮花經」と称え、更に、杖木でうち、おいはらう。逃げる時に、沙門の落した経袋を、取り置いて、その後忘れてしまった。死後、その経袋に、残っていた經一卷が、孫居を、救つた。

何況や、内親王殿下の名聞のためにもあらず、利益のためにもあらず、心をいたして、一部八卷廿八品をしかしながら受持、誦誦し、日々に開講、演說せしめ給ふ。心しても思ひ、ことばしても申つくすべからぬ御功德とこそ思え候へ。(136頁)

孫居のような場合でも、その経袋の経によつて、救われている。それに、比して、内親王の救済は、自明の理であること

を、述べている。

以上が、「何況や……」という形式で、むすばれている文である。

○まして……

△二月二十九日

仏法に、信をいたさぬ、不信の男は、道如のもとに、錢を借りに行き、心ならずも、「法花經」の方便品の一字を書く、硯の水を、加えた。しかし、その功德によつて、地獄より、蘇生した。

方便品の一字をかきしすずりの水をくはへたるだにも、仏さこそ利益したまひけれ。ましてよぎりなき御心に、開講演説の御心をや。(86頁)

不信の男の行為にも、地獄からの蘇生という、功德が、与えられている。従つて、内親王の功德は、はかりしれないものである。

△三月二日

宋の朱齡石は、楊州から、船出し、途中、嵐にあい、九千里離れた、仙人の居る島に、漂着する。しかし、仙人の船にのせられ、元の楊州に、かえりつく。

まして、生死の大海、たとひ悪業のなみたかくとも、船若の船にのりて、觀世音菩薩にちちをささせたまつりて、菩提の彼の岸にわたらむことは、ほどあるべき事にもあらずなむはべるべき。(92頁)

仙人の船の力を、説明することにより、觀音の偉大な力を、

のべようとしたものである。

△三月八日

仙人の衣を、着た場合でも、病気が、ことごとく、よくなつた。

まして、如来の六度万行の糸すぢしてをり給へる慈悲忍辱の衣にはむかれなむ人は、悪業煩惱の病もすなはちのぞかり、菩提彼の岸にもはやくいたりたまはむこと、疑もなきことなり。(100頁)

仙人の衣と、慈悲忍辱の衣を、比較して、のべたものである。  
△三月二十四日

猿の親が、師子に子供を、あずけて、食物をさがしに、出かける。ところが、大きな鳥が、空から、やって来て、猿の子をつれさり、高い木の上で、食べようとした。師子は、自分の腿の肉を、猿の子の大きさに、つかみとり、鳥にそれを与えて、とりかえた。

けだものすら、約束をたがへぬことなり。まして、薬王菩薩も、勇施菩薩も、四天王も、十羅刹も、心をおこして、釈迦如来のまへにして、ちかひたまひてむことは、うたがひあるべきことにもあらず。(113頁)

猿の親と師子との約束を、ひきあいに出して、勇施菩薩等の約束の、確實さを、証明しようとしたものである。

△三月二十七日

乱の為、山林に遁れた、国王と夫人の飢えを、その王子が、自分の肉を、さし出し、助ける。このことに、帝釈天が、感

じ、その王子の傷ついた身体を、もとにもどしてやった。

まして、大乘経を百今日供養したてまつらせ給て、をののの後世菩提をとぶらひたてまつらせ給を、いかばかり諸仏、世尊も、かぎりなき御孝養なりとほめ悦給。(120頁121頁) 両親の飢えに、自らの肉を、供したるものよりも、猶、大乘経の、百か日の供養の方が、すぐれていると、結論している。以上の箇所が、「まして……」という形式で、むすばれている文である。

「何況や」まして」という、これらの文章は、いずれも、前述したように、より低次なるものを示し、それに、比べて、よりよい条件の場合を、効果的に、のべる方法である。

(2)

さて、以上、引用してのべたところを、よく見ると、より低次なるものを、示す例話があり、次に、その例話から、導き出される結論が、示されている。例えば、

○例話十

この経は、一偈一句を持ちたてまつるに、命のび、病のぞかずといふことなし。

何況や、ふかく信じ、あつたのみたてまつらせたまはむ功德をや。(89頁)

○例話十

方便品の一字をかきしすずりの水をくはへたるだにも、仏さこそ利益したまひけれ。ましてよぎりなき御心に開講、演説の御心をや。(86頁)

などである。つまり、例話から、導き出された結論（例話はその結論を、のべる為に、あげられた話である）を、もとにして、「何況や（まして）」以下のことを、のべているのである。そこで、次に、「何況や……」「まして……」で、類推されている個所に、目を転じてみよう。

●何況や、内親王殿下の、我も玉の御すがたをかたぶけて、頗梨をかけ、露をつらぬく点、ひとつもかくる事なく、人をおしへて書写せしめ給事も、年しごろにならせ給ひぬるうへに、今百座御講、開講、演説せしめ御す功德は、申すべからぬ事なり。（94頁）

●何況や、内親王殿下の名聞のためにもあらず、利益のためにもあらず、心をいたして、一部八卷廿八品をしかしなから受持、読誦し、日々に開講、演説せしめ給ふ。心して思ひ、ことばしても申つくすべからぬ御功德とこそ思え候へ。（136頁）

などである。これらは、内親王の、先考、先妣の爲の、開講・演説の功德について、言及したものが、大部分である。要するに、『法花経』の各品を、講説するにあたって、まず、講説する各品の意味を、説明する。

（釈名）、此の品の心は、仏け化城の喩ひをかりて、二乗成（道の旨を説き給へるなり。（136頁）

のようにである。更に、入文判釈のある場合もある。そして、その内容を、比喩譚をもって、わかりやすく説き、その比喩譚より、導かれる結論を、のべる。その結論の次に、「何況や」

「まして」というようにして、内親王の功德が、いかに、大きいかを、のべて、施主段としている。全体としてみると、開講演説の発願者である、内親王に対しての、心配りが、顯著に、うかがえる。

### おわりに

『百座法談』における、常套句ともいえる、結びの一つである、「何況や……」「まして……」という語を、見てきた。

わずかな行爲が、善根となり、地獄から、蘇生したりする結果を、齎した例話を、語り、それに比して、内親王の功德は、甚大である旨を、効果的にのべているものである。あるもの、大きさを、説明する場合は、もっとも端的な方法は、より小さいものと、比較してみる方法であろう。そういう単純で、かつ、極めて、効果的な方法が、ここにおいて、用いられているものであり、聞く人は、わずかな善根でも、しかるべき功德を、齎す『法花経』の一字一字や、首題の名字等に、感激し、信仰心を、深めるのであろう。そして、内親王の、開講、演説の善根の大きさに、驚嘆しつつ、又、その受ける功德の大きさを、想像したものと、思われる。内親王も又、講師により、説かれる功德の大きさに、開講、演説の意義深さを、感じたものであろう。そういう風に、人々を、説得し、かつ、納得させる、説き方の順序を、考えた時に、「何況や」「まして」という語の、はたす役割は、重大かつ効果的であったといえるのである。